



野外保育における発達的气になる幼児の行動拡大への保育士のかかわりの効果

メタデータ	言語: jpn 出版者: 宮崎大学教育文化学部 公開日: 2020-06-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小笠原, 明子, 立元, 真, 前田, 泰弘, Ogasawara, Akiko, Maeda, Yasuhiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10458/5383

野外保育における発達的气になる幼児の行動拡大への 保育士のかかわりの効果

小笠原明子¹ 立元真² 前田泰弘³

**The Effects of a Nursery School Teacher Using Outdoor Daycare to Improve
The Behaviors of a Preschool Boy with Features of Developmental Disorders**

Akiko OGASAWARA, Shin TATSUMOTO, Yasuhiro MAEDA

近年、保育所や幼稚園などの集団生活の場では、「こだわりがある」、「新しい環境に慣れにくい」、「行動の切り替えが苦手である」、「指示を聞き入れられない」、「衝動的・多動的行動を示し感情を抑えられない」、「消極的で自信のない発言が目立つ」、「他児と比較し自信をもつことができない」などの行動を示すために集団生活の遂行に困難を示す、いわゆる「発達が気になる幼児」への対応が喫緊の課題となっている。保育所保育指針では第2章の「子どもの発達」において「子どもは、様々な環境との相互作用により発達していく、すなわち、子どもの発達は、子どもがそれまでの体験を基にして、環境に働きかけ、環境との相互作用を通して、豊かな心情、意欲及び態度を身に付け、新たな能力を獲得していく過程である」と環境とのかかわりを述べており、さらに、同「保育の目標」では、「生命、自然及び社会の事象についての興味や関心を育て、それらに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うこと」、「様々な体験を通して、豊かな感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うこと」とし、保育の環境として「子ども自らが環境に関わり、自発的に活動し、様々な経験を積んでいくことができるように配慮すること」と明記している(厚生労働省, 2008)。しかし、発達が気になる幼児は、日常生活において環境(人的環境・物理的環境・自然や社会の事象)へのかかわりに困難を示すことが多く、興味や関心をもちにくく様々な経験を積むことが難しい現状がある。したがって、このような発達が気になる幼児が自らさまざまな体験ができるよう、環境とのかかわりに重点を置き、子どもの発達を促進する保育方法が検討される必要がある。

発達が気になる幼児が示す環境へのかかわりの困難さの背景として、これまでの研究では、これらの幼児には総じて身体活動等に不器用さが見られることが報告されており(辻井・宮原, 1999)、その背景には、身体感覚の歪みがあることも報告されている(宮崎・藤井・西條・森・橋本・香美, 2007)。このような現状に対して筆者らは、身体感覚を多様に使う自然環境を利用した野外保育を実践し、身体感覚の歪みが、それらの感覚を含む直接的な体験を促す活動を繰

¹ 白梅学園短期大学・白梅学園大学, 平成25年度宮崎大学教育学研究科研究生

² 宮崎大学教育文化学部

³ 和洋女子大学人文学群

り返すことにより改善することを報告してきた(前田・小笠原, 2009; 小笠原・前田, 2009a)。また、自然環境を利用した野外保育を通して見られる子どもの身体感覚の改善のプロセス(小笠原・前田, 2010)や、その改善がQOLの向上にも有効である事例について報告してきた(前田・小笠原, 2008)。さらに、筆者らは野外保育を続ける中で、子どもには身体感覚を利用して外界の世界を経験することを基盤として、「感じる」、「考える」、「判断する」、「行動する」という育ちの流れがあることを明示した(小笠原・前田, 2009b)が、気になる行動を示す子にはこの流れに滞りがあることも分かり、大きく2つのタイプに分かれることを報告した。それは身体感覚の未熟さや歪みから「経験の質」が不良になり、行動様式が適正な形で発現しないタイプ(なんとなくはできるが、どこか適正ではない)と、「経験の量」が不足するために適正な行動様式が積みあがらない(適正な行動に至らない)タイプであった(前田, 2009)。

今後、このような知見を保育現場の中で適用していくためには、子どもの身体感覚の改善や行動の拡がりに効果的であったと考えられる保育士のかかわりを明らかにし、体系的に整理する必要があると考えた。そこで、本研究では、筆者らが実施した野外保育への参加により「衝動的、多動的行動を示し感情を抑えられない」、「他児と比較し自信がもてない」などの生活の困難さが改善した幼児の事例について、児に対する保育士の声かけや対応を実際の保育記録から分析することにより、その改善や拡大に効果的であった保育士のかかわりを整理し体系化することを目的とした。

方法

野外保育の実践方法 筆者らの実践する野外保育とは、自然の中にある地形や素材を利用して、子どもが自らの興味・関心と自分のペースで活動する中で行動の基盤としての身体感覚の向上を図り、その結果、自発的に創造的な活動ができることをねらいとした保育のことである。

この野外保育は、活動の結果や到達点が一律でなく、またそれらに至る過程も様々であるため、子どもの育ちでは、この多様な過程を繰り返すことにより発想力や考察力、判断力、実行力などが育まれると考えられる。野外保育ではこの過程の体験を重視するため、保育を個別の配慮のもとに行うことを中心として、子どもが自ら考え、判断し、実行する過程と試行錯誤の機会を得られることを大切にしている。そのため、野外環境(山林)において保育士1名と幼児1名の個別活動の形態で行った。頻度と時間は原則として2週間に1回、90分であった。

野外保育は、子どもの興味・関心とペースで身体感覚を利用した直接体験ができるよう配慮した。身体感覚を使う代表的な活動としては、不整地歩行(整地されていない山道を歩く)、傾斜地昇降(土手状の斜面を登り降りする)、小川渡り(小川の中や石の上を渡る)などを中心に行い、さらに、自然の中にある素材を使い適宜活動を作ることで子どもが自発的、創造的に活動を作ることができるよう見守り、経験の幅が拡大できるよう配慮した。また野外保育を通じて、育ちの流れが育まれるよう環境を整え、課題の達成を待つことを重視した。育ちの流れとは、筆者らがこれまでの保育経験や野外保育実践の中で経験した子どもの行動の拡大過程(自ら考え、判断し、行動する)を体系化した(小笠原・前田, 2009b)ものである(図1参照)。

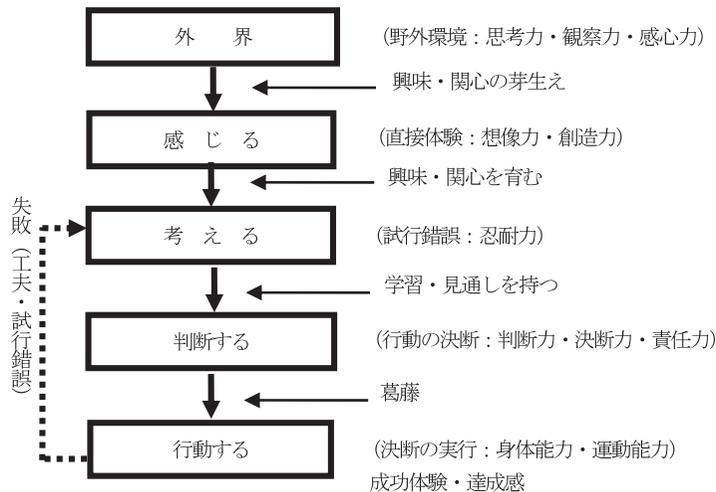


図1. 育ちの流れ

野外保育の期間 本研究では野外保育を3つのステージに分け、その保育記録から子どもの行動や保育士のかかわりを分析した。第1ステージはx年7月10日からx+1年2月12日まで。第2ステージはx+1年3月4日から同年10月16日まで。第3ステージは同年10月28日からx+2年6月23日までであった。

対象児 対象児はA児(初回来所時4歳8ヶ月, 男児)である。医療機関より広汎性発達障害の疑いを告げられている。発達検査では顕著な遅れは見られず、通園する幼稚園での活動の遂行も概ね可能であるが、「衝動的、多動的行動を示し感情を抑えられない」、「他児と比較し自信がもてない」など生活に困難を示すことがあるため筆者らの所属機関への来所・相談となった。

評価の方法 対象児の事前評価は、(1)保護者からの幼児の様子聞き取り、(2)発達検査(乳幼児発達スケール。以下、KIDS; 三宅・大村・高嶋・山内・橋本, 1989)、(3)身体感覚の評価(日本感覚インベントリー。以下、JSI-R; 太田・土田・宮島, 2002)により行った。JSI-Rは、4歳から6歳の幼児の身体感覚の発達を評価するスケールである。前庭感覚、触覚、固有受容覚、聴覚、視覚、嗅覚、味覚、その他の感覚の状態を反映する行動項目(146項目)について、その表出が「0=まったくない」から4=いつもある」の5段階で評価するものである。それぞれの感覚領域および全体(総合点)で得点を集計し、その得点が当該の年齢が呈する状態の上位約5%に入る場合、感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測されると評価する(評価表では“RED”と示す)。次いで、得点が全体の約20%に入る状態の場合は、若干、感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される(評価表では“YELLOW”と示す)と評価する。これより得点が低い状態の場合は、典型的な状態(評価表では“GREEN”と示す)と評価をする。活動の事後評価はこれらに(4)保育士による野外保育実践の記録を加えて行なった。

結果

野外保育開始当初の児の様子 初めての来所時には、本児には保育士に対して強い口調や態度でかかわる、すぐに癩癩を起こす、事物への興味が次々に変わるなどの様子が見られた。

初回の野外保育では、「走る際に足が絡まる、ふらつく」、「斜面を下る際、腰が引け身体を横向きにして下りる」などの身体コントロールの拙劣さや、「フェンスをくぐる際に頭、背中、お尻をぶつける」といったボディイメージの未熟さ、「筆圧が強い」、「強く叩く」などの力のコントロールの拙劣さが見られた。また、「相手の状況を理解できず自分中心に動く」、「気持ちが高ぶると言葉や行動が乱暴になる」などの感情コントロールの拙劣さや「保育士と離れると不安になる」、「新しい道や場所に行くことを拒む」など不慣れな環境に不安を示す姿が見られた。本児は眼で見た活動を自らの能力によらずできると考える傾向があり、その行動に失敗したときに理由を理解することができず、気持ちが不安定になる様子(イメージ変化への不得意さ)も見られた。この時点での身体感覚の評価(JSI-R)の検査結果は表1に示す。

各ステージの子どもの行動と保育士のかかわり

第1～3ステージ末に行った各検査の結果を表1に示す。

表1 発達検査(KIDS)と身体感覚評価(JSI-R)の結果

	検査日(年齢)	x年7.10(4:08)	x+1年2.12(5:03)	x+1年10.16(5:11)	x+2年6.23(6:07)
発達検査	運動	12 (5:01)	13 (5:03)	15 (5:08)	16 (6:05)
	操作	10 (5:00)	12 (5:04)	15 (6:09)	15 (6:09)
	理解言語	14 (5:10)	15 (6:01)	15 (6:01)	16 (6:10)
	表出言語	11 (4:10)	14 (5:10)	15 (6:04)	16 (6:10)
	概念	10 (4:06)	11 (5:00)	15 (6:06)	15 (6:06)
	対子ども社会性	9 (4:06)	14 (5:01)	16 (6:01)	15 (5:04)
	対成人社会性	10 (5:08)	11 (5:09)	12 (6:06)	14 (6:09)
	しつけ	13 (3:11)	15 (4:01)	19 (5:08)	21 (6:07)
	総発達年齢	4:11 (89)	5:06 (105)	6:02 (122)	6:07 (128)
	総発達指数	105.36	104.7	104.22	100
身体感覚評価	前庭感覚	26	25	11	6
	触覚	25	26	10	4
	固有受容覚	17	12	6	6
	聴覚	16	16	7	8
	視覚	24	21	10	8
	嗅覚	1	4	1	0
	味覚	3	4	1	0
	その他	22	20	14	17
	総合点	134	128	60	49

(検査日の括弧内は生活年齢、各検査領域の括弧内は発達年齢である。身体感覚評価のセルの塗りつぶしのないものは「GREEN」評価、薄灰色は「YELLOW」評価、濃灰色で反転は「RED」評価を示す。)

＜第1ステージ＞ 第1ステージでは、まず野外環境にいることに慣れ、自らいろいろなものに接近できる(感じる)ことをねらい(目標)とした。また、このねらいを達成するための保育士のかかわりの方針として、児の活動中は肯定的な声掛けをし、無理強いをせず、児のペースに合わせることで環境に慣れることができるように配慮することとした。

第1ステージ当初の児の様子 活動の中で、「走る際に足が絡まる」、「斜面を降りる際、身体が後傾して滑る」、「フェンスをくぐる際に、頭や背中、尻がぶつかる」、「倒れた一輪車を起こすことができない」、「手が汚れることを嫌がる」、「乱暴なことばを使う(～しろよ、～だろなど)」、「保育士と離れると不安になる」、「相手の行動や表情に注目せず自分中心である」、「靴を履く際、左右が反対になっていても気付かない」などが見られた。

第1ステージの保育士のかかわり 「失敗も容認し、危険のない限り本児の取り組みを見守る」、「児と離れるときにも常に視野に入れ、安心できる環境をつくる」、「話は短く具体的に伝える」、「無理強いをしない」、「周囲に目が向くように声をかける」、「保育士の手本を見られるようにし、教え込まない」などのかかわりをし、児が活動の意欲を持続できるようにした。さらに、児が失敗しても「挑戦したことやできたところまでを確認し誉める」、「失敗の経験を振り返り試行錯誤する場を設ける」、「できたことを誉め自信を高める」などの配慮を行なった。

このような配慮を加えた野外保育を行った結果、第1ステージの終盤には、自ら周囲の様子に目を向けて意識するといった姿が見られるようになった。

＜第2ステージ＞ 第1ステージの様子をうけて、第2ステージでは、外界とのかかわりを密にし、感じる力の向上を図ることとした。また、遊びを創りだす(考える)ことや身体の動きの理解を深めることで、自らが考え、判断をし、行動に移せるようにし、直接体験や成功体験を重ねることで自信をもつことをねらい(目標)とした。

保育士のかかわりの方針として、児が自発的に行動できる環境を整え、児自らが身体の動きを意識できるよう声をかけ、危険のない限り児の行動を見守ることで直接体験や成功体験の機会が増えるよう配慮した。

第2ステージの児の様子 この時期には「トランポリンを両足揃えて膝を使って跳ぶ」、「バランスを崩してもすぐに立て直すことができる」など姿勢や身体をある程度コントロールできる姿が見られた。また、「遊びに夢中になっていても保育士の指示が耳にはいるようになった」、「相手の行動を見て誉めることができる」などのように周囲の状況に気づいたり、「散歩に出かける際に持っていくものを自分で決める(何が必要か考える)」、「待つように言われると待っていることができる」など見通しを立てて行動する姿も見られた。さらに、「保育士に注意されると、なぜ注意されたのか理由を答えることができる」、「自然を用いて自ら遊びを考え、創り出し、その遊びに保育士を誘う」、「活動中、こうしよう、こうしたらいいなどと提案をする」、「意見が通らなかつたときには代替案を出す」など、周囲の状況に合わせてやりとりをする姿も見られるようになった。その一方で、「常に全力で動く」、「勢いが余り段差でつまづく、段差までの距離感がつかめない」、「石に絵の具で彩色をする際、力を入れすぎ筆先が開いてしまう」、「保育士が近くにいると強くボールを投げる」、「あと何回という約束を守ることができない」、「室内遊びから戸外へ行く切り替えが難しい」、「見たものは自分でもできると思うが、実際に行なうとできない」、「次の活動に移る際、使っていた遊具を片付けることができない」などの気になる動きも見られた。

第2ステージの保育士のかかわり 「児に起きた予想外のことに對しては、その都度どのよう

にしたらいのか対応を具体的に伝える」、「できたことは誉めつつ、できていないことにも気づくことができるよう、端的に理由を伝え見守る」、「児の行動を否定せずに、事実や周囲に目を向けることができるように伝える」、「児の提案に賛同し、一緒に行なう」などの配慮を行い児に自信が生じるよう心がけた。さらに、失敗したときには「失敗の手前までは成功していた事実を伝え、誉める」、児が「自分の身体の動きを意識できるように声をかける」、あえて失敗する場を設けて様子を見守り「理由を考える(試行錯誤する)場をつくる」などの配慮をした。

その結果、第2ステージの終盤では、自分の身体の動きを意識する姿や自分とものとの距離(関係性)を考慮する姿が見られるようになった。

<第3ステージ> 第2ステージの様子をうけて、第3ステージでは、さらなる自発的な行動と成功体験を促しながら、失敗をした際には対処や行動の修正ができることを知る(試行錯誤できる)機会を増やすこととした。この中で、児が場面に応じた的確な行動の選択と判断へつなげる機会を与えることをねらいとした。

第3ステージでは、保育士は、児ができている事実(できたところまで)を伝え、誉めることで、マイナスのイメージをなくし意欲を持続できるように配慮した。

第3ステージの児の様子 この時期には「台車(カート)に乗り一人で坂道を下る」、「ボールを蹴る際、保育士との距離にあわせて力を調整できる」などの身体コントロールが見られた。また、「乱暴なことばを自ら言い直す」、「相手の気持ちに気づきそれに合わせた対応をする」、「自ら遊びを考え保育士に提案する」、「穴掘りをして遊ぶ際、上手く掘るために座る位置を変える工夫をする」など周囲との関係を修正または促進する様子が見られるようになった。一方、気になる姿としては「川の中を歩く際に足元を見ず深みにはまる」、「戸外でものを投げた際、行き先を追跡できない」などの見通しの弱さや、「自分の都合の良いようにルールを変える」といったイメージ変化への適応の弱さ、「上着を着る際、着かたが乱雑」など協調運動の弱さなどが見られた。

第3ステージの保育士のかかわり 「できたときには、その事実を伝え振り返り、児が気付けるようにする」、「児の考えたことに賛同する。賛同できないときは理由を具体的に伝える」、「児が考え、工夫できたことを認め、誉める」、「困っているときには、どのようにしたら良いのか考えられるよう声をかける」などのかかわりの配慮を行い、児自身が状況に対し的確な判断ができるようにした。さらに、児自らが考え、動きを意識できるよう声をかけ、児や周囲に危険のない限り見守ることを重視し、児が自ら考え、試行錯誤する機会を設けるよう配慮した。

その結果、第3ステージの終盤には、周囲の状況を素早く理解し、それに見合った行動を考える姿が見られるようになった。

野外保育の開始当初、本児には自分の身体部位や力そして感情をコントロールすることの不器用さや、自らが考えるイメージと異なる状況が起こることへの不適応が見られていた。このような状況から、本児は外界の把握が難しく、外界とのやりとりの経験が十分ではなかったことが考えられる。このことは、図1で示した育ちの流れに当てはめると、「外界」とのかかわりが適切ではなく、「感じる」ことや「考える」ことが十分に行えていなかったと考えられる。

野外保育を開始した当初の背景から、第1ステージではまず外界へのアプローチができることをねらいとした保育を行った。直接的な経験を繰り返せるよう配慮をしたことで、第1ステージ終盤では外界へのアプローチが容易になり、さらにそれらの様子の把握もでき始めてきたことがわかった。この時の保育士の具体的なかかわりは「肯定的な声かけ」、「無理強いをし

ない」、「危険のない限り見守る」、「保育士の手本は見せるが教え込むことはしない」、「挑戦したことやできたところまでを誉め自信をもてるようにする」、「自分で考える、試行錯誤する場を設ける」などであった。このように児のペースに合わせ活動し、環境に慣れるよう配慮したことで、直接体験の機会が増え、結果として繰り返し行動を試行する意欲につながることとなり、そのかかわりが有効であったと考えられる。

第1ステージで外界への気づきが萌芽してきたことから、第2ステージでは直接体験を繰り返し行なうことにより、外界へ自発的にアプローチできることをねらいとした保育を行った。活動の中で保育士が「児が自分の身体の動きを意識できるよう声をかける」、「児の好きなように行動できるよう環境を整える」、「児の行動を否定しない」といった配慮をしたことで、児は自分のペースで行動し直接体験を重ねることができた。その結果、児は、外界である人やものとの関係や距離の把握が可能になっていた。また、それにより外界と自分との関係を意識できるようになったことで、外界と相互的なかかわりをするための身体コントロールの向上も認められた。この時の保育士の配慮のポイントは、児が外界へアプローチしている時には極力見守ること、また、児が自分の動きを意識的に考える機会をつくり、失敗した際にはその理由や素材の性質を考え、新たな方法を見つけられるようにしたことであった。具体的には、「児が失敗したときには、その手前までは成功していた事実を伝える」、「児が事実や周囲に目を向けることができるよう伝える」といった配慮であったが、これにより外界へのアプローチをスムーズに行うことが可能になったことに加えて、うまくいかなかった際の自らのイメージとの乖離に対して感情をコントロールできるようになったと考えられる。

活動を繰り返し行うことで、児は外界との関係を「考える」ことができるようになったが、これにより自分だけでなく他者の様子も踏まえながら、行動を考えることができるようになったと考えられる。すなわち他者との関係性の中で自らの行動を調整できる力が萌芽してきたことを意味するが、その結果として、後には自らの意見が通らないときに児が代替案を出せるようになった。これらの結果から、保育士が、児の行動やその失敗経験に対してその時々の実事を丁寧伝えるといった保育方法は、失敗をしても他の行動を選択できるという行動を生起させるための基盤になると考えられる。

この時の様子を育ちの流れ(図1)に当てはめると、外界を「感じる」力の向上とともに「考える」力も向上し、結果として自分や他者の立場を「判断する」ことができるようになってきたと考えられる。なお、この時の身体感覚の検査結果では、姿勢や動作を作るための前庭感覚、固有受容覚、また外界の情報を取り入れるための触覚、視覚の偏りが改善されていた。直接経験を重ねたことでこれらの改善が見られたと考えられるとともに、この改善が人やものとの距離感の把握や身体コントロールの向上、外界へのアプローチをスムーズに行うといった様子に反映されたと考えられる。

第2ステージでの保育を通じて、外界と自らの関係性の理解やかかわりが向上したこと、さらに活動にあわせた身体コントロールが向上したことから、第3ステージでは、さらなる自発的な行動と試行錯誤の機会を増やした。児が場面に応じた的確な行動の選択と判断を向上させることをねらいとし、引き続き、活動を無理強ひせず、できている事実を伝え誉めて活動の意欲をもち続けられるようにする配慮を行った。また、児が自ら考え行動したときには、児や周囲に危険のない限りその行動を尊重したり、試行錯誤する機会をあえて設けるようにした。このように児が成功体験や失敗体験、さらには試行錯誤する経験を重ねられるようにした結果、

場面や状況にあわせて自らの行動を考えることができるようになったと考えられる。育ちの流れ(図1)で説明するならば、周囲を「感じ」、その状況を基に「考える」ことを繰り返し経験した結果、場面に応じて「判断する」(自分の力量と経験を基に判断する)力が向上したと考えられる。身体感覚の検査では、前庭感覚や固有受容覚、触覚、視覚の状態が第2ステージよりも改善されていた。この結果からも、児はさらに外界の状況を理解する力が向上し、活動の状況に合わせて身体を使いこなすことが可能となったこと、さらに試行錯誤しながら自分の力量と経験を基に自ら判断する基盤ができてきたと考えられる。

考察

野外環境は、室内に比べて開放的な空間であり制約が少ないため本児のように力のコントロールが拙劣で強い刺激を好む児にとっては欲求を満たす活動を行なうのに適した環境であった。また、野外には子どもの動機づけや創造性を高める素材が多く存在しており、子どもの興味や状況に応じた課題の設定が可能である。このような条件を備えた野外環境の利用が、本児が独自の感性とペースで、潜在的にもつ感覚を発揮することを容易にしたと考えられる。

個別的な支援は、集団場面のように他児の存在や行動を意識する必要がないため、対人関係上のストレスが少なく、特に、「衝動的・多動的行動を示し感情を抑えられない」、「消極的で自信のない発言が目立つ」、「他児と比較して自信を持つことができない」、といった特徴を有する本児にとっては、周囲を気にすることなく自分のペースで自ら様々な活動に取り組める環境であり、自発的な活動の促進に適した環境であったと考えられる。また、野外保育を行なう際には、「子どもや周囲に危険のない限り子ども自身の行動を待つ(見守る)」、「子どもの行動への肯定的な声かけを行なう」、「その時々的事实を伝え責めることや説得をしない」といった配慮を行ない、この原則に加えて第1ステージから第3ステージにかけて「無理強いをしない」、「できていることに児が気づくように声をかけて誉める」、「自分で考える、試行錯誤する場を設ける」といったかかわりを行なった。さらに、「子どもや周囲に危険のない限り子ども自身の行動を待つ(見守る)」といった配慮を行なったが、これらを重ねたことが、児が自分の意思で行動・挑戦することや、自分で考えじっくりと取り組むことの促進に寄与したと考えられる。また、これにより活動の達成経験が増えたことが自信につながり、遊びの拡がりや感情コントロールの向上につながっていったと考えられる。

保育活動では、「子どもの行動に対して肯定的な声かけを行なう」という配慮を行ったことが、児の自分の気持ちを受けいれてもらえるという受容感の獲得に有効であったと考えられる。児は安心感や満足感を得、保育士の存在を意識して行動することや、保育士を模倣する契機になったと考えられる事例が認められた。このように他者を意識した活動を通じて、さまざまな身体活動を経験することが身体コントロールの不器用さや力のコントロールの拙劣さの改善につながることも、本研究の結果は支持していると考えられる。さらに、「その時々的事实を伝え責めることや説得をしない」といった配慮は、児が自分の行動に目を向けることを可能にし、自分の身体の動きを意識することや、他者やものとの関係や距離の把握を促すとともに、ボディイメージの改善を可能にするものであったと考えられる。この時、保育士は「無理強いをしない」という配慮も行なったが、本児のペースで外界とのかかわりや動機づけを提供する上では大切なことであり、これにより児は直接体験の場を保障することができ結果として自分の身体の感

覚を発揮できるようになったと考えられる。「できていることに児が気づくように声をかけて誉める」という配慮は、保育士が自分を見てくれているという安心感を生起させるうえで重要であったと考えられる。さらに、行動の結果だけを誉められるのではなく行動の過程も誉められることで、児が行動の過程を意識に振り返ることを可能にし、さらに「できた」という成功体験を通して自己肯定感・自己有能感を得ることを可能にしていた。このことが、活動の自発性の高まりを促したと考えられる。「自分で考える・試行錯誤する場を設ける」という配慮は、児が失敗を恐れず、たとえ失敗してもそのことを受け入れ自分で考え判断・決断し、実行(行動)することを可能にし、活動の幅を広げる基盤になったと考えられる。

本児は、感情調整、イメージ変化への対応、見通しの形成、他者やものとの距離の把握が向上するタイプであった。当初は、身体感覚の不熟さから経験の質が不良であったが、野外保育の中で興味・関心をもとに自分のペースで直接体験を重ね身体感覚を利用できたことで、自分と人やものとの関係や距離の把握の改善につながり、外界を「感じ」、それらをもとに「考える」ことが可能となったと考えられる。その結果、育ちの流れがスムーズになり、「判断する」ことが容易となり、望ましい形で行動することが可能となった。そして、成功体験の増大や自己有能感の向上、活動の幅の拡大につながったと考えられる。

野外保育では育ちの流れを意識した保育を実践したが、同時に発達検査と身体感覚の評価も行った。このことは、児の発達状況を客観的に評価、理解すると同時に、保育士が実践の中で感じる児の育ちの流れの現状を、考える力(知的発達)、判断する力(社会的認知発達)、行動する(運動発達)の観点から再確認したり、児の感じる力(感覚発達)の特性を理解するために効果的であった。このように保育実践の中での保育士の主観的評価を客観的評価によって支えたことが、児の特性を保育士が適切に把握し理解することを可能にし、保育計画の作成やかかわり方に連続性をもたせることを可能にしたと考えられる。

緒言にも記した通り、保育所や幼稚園に在籍する発達の気になる幼児は、環境(人的環境・物理的環境・自然や社会の事象)へのかかわりに困難を示したり、身体活動等に不器用さを示すことが多い。そのような発達の気になる幼児に対し、野外保育を通じて個の発達、とくに身体感覚の発達に合わせた活動を行なうことで、児のもつ多様な力を発揮させることが可能となることが分かった。さらに、保育士が環境を整えて児の行動を「待つ」、「見守る」、「肯定的フィードバック(誉める)」、「事実を伝える」といった保育を行うことが、子どもの自発的で主体的な活動を促進することが確認された。さらに保育士が活動に対して無理強いすることなく、子どもの活動に応じて臨機応変に課題を設定することで、子どものもつ力を引き出し、直接経験や成功経験あるいは試行錯誤する機会を増やすことが確認された。

また、育ちの流れ(図1)は、子どもたちが自発的な体験活動を積むために必要な流れを示している。この育ちの流れを意識した保育方法を計画することが、子どもの発達を促す上で効果的であることも本研究により支持されたと考えられる。

本研究では、個別活動の形態で野外環境を用いて行なわれる野外保育の効果を子どもの行動変容と保育士のかかわりの視点から検証した。野外保育では、子どもが発達していく過程を重視したかかわりを行った。これらは、保育所や幼稚園といった集団の中でも保障されるべき事柄であるが、集団での保育の中では、日常生活の中で一定の結果が求められることが多く、結果に到達できない子も現れてくる。また、結果を重視するために過程が軽視されてしまうこともある。保育所・幼稚園といった集団の保育の中でも、過程を重視したかかわりが、結果につ

ながることが提起できよう。

昨今は、保育者・教育者への障害に対する知識を得る機会が増え、様々な障害の理解が進んできた。しかし、その反面、保育者・教育者が、子どもの実態を把握せず、障害名に反応して子どもへの対応をしてしまう実態が少なからずあることは否定できない。また、集団での保育では気になる子だけに配慮をすることは難しいが、例えば、集団的なペアレント・トレーニング介入(福島・立元・古川・齊田・椎葉, 2013)と必要に応じての個別介入(Tatsumoto, Furukawa, Nagatomo, Fukushima, 2011)を組み合わせるシステムを考えること、保育者個々のさらなるスキルアップ(立元・児玉・井上・吉川, 2006)を図ることが重要であろう。

引用文献

- 厚生労働省(2008) 保育所保育指針平成20年告知 フレーベル館
- 福島裕子・立元真・古川望子・齊田聖美・椎葉恵美子(2013) 幼稚園教諭自身によるペアレント・トレーニングの実践(2) 一どのような子どもに効果が見られたのか— 宮崎大学教育文化学部紀要, 28 教育科学, 73~81頁
- 太田篤志・土田玲子・宮島奈美恵(2002) 感覚発達チェックリスト改訂版(JSI-R)標準化に関する研究 感覚統合研究, 9, 45-56.
- 小笠原明子・前田泰弘(2009a) 野外保育による不器用な幼児の身体感覚の改善効果. 日本保育学会第62回大会発表論文集, 185.
- 小笠原明子・前田泰弘(2009b) 野外保育による幼児の「育ち」の支援. 保育学研究, 47. 2. 121-131.
- 小笠原明子・前田泰弘(2010) 不器用な幼児の主体性を引き出す保育. 日本保育学会第63回大会発表論文集, 226.
- 前田泰弘(2009) 野外保育による発達が気になる幼児の「育ち」の支援. 東北福祉大学研究紀要, 33, 407-417.
- 前田泰弘・小笠原明子(2008) 野外保育による幼児の身体感覚の改善がQOL向上に及ぼす効果. 日本発育発達学会第7回大会発表論文集, 66.
- 前田泰弘・小笠原明子(2009) 野外保育による直接体験の保障が発達の気になる幼児の育ちに与える効果. 日本特殊教育学会第47回大会発表論文集, 492.
- 三宅和夫(監修)・大村政男・高嶋正・山内茂・橋本泰子(1989) 乳幼児発達スケール(KIDS)TYPE C. 財団法人発達科学研究教育センター, 第5版8刷
- 宮崎雅仁・藤井笑子・西條隆彦・森健治・橋本俊顕・香美祥二(2007) 軽度発達障害(注意欠陥多動性障害(ADHD)／高機能広汎性発達障害(HFPDD)の体制感覚機能 臨床脳波, 49, 8, 505-510.
- 立元真・児玉育子・井上妙子・吉川瑞枝(2006) 幼稚園教諭への養育スキル研修が幼児の行動に及ぼした効果 臨床発達心理実践研究誌, 1, 52~56.
- Tatsumoto S., Furukawa M, Nagatomo E, Fukushima H (2011) The Effects of Individual Preventive Behavioral Parent Training to mothers referred from Perinatal Medical Center. Presented at the 3rd ACBTC 2011 Asian Cognitive Behavioral Therapy Conference
- 辻井正次・宮原資英(1999) 不器用な子どもたち, プレーン出版